



Data

監督・脚本: ユン・ダンビ

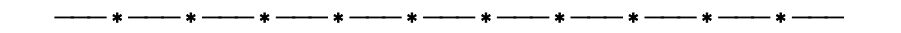
出演: チェ・ジョンウン / パク・ス
 ジュン / ヤン・フンジュ /
 パク・ヒョニョン / キム・サ
 ンドン

👁️👁️ みどころ

注目すべき若手監督は日本にもいるが、韓国では、中国に負けず30歳前後の若手監督の躍進がすごい。「驚くべきデビュー作！エドワード・ヤン、小津安二郎、ホウ・シャオシェンを彷彿とさせる、恐るべき才能」と称された若手女流監督、ユン・ダンビが10代の少女の視点で描いた“家族の物語”とは？

戦争映画でもサスペンス映画でもない淡々とした“家族の物語”なのに、なぜ目がスクリーンに集中するの？少しいびつ、そして、仲がいいのか悪いのかがわかりにくい4人（5人）家族の“ひと夏の物語”をじっくり味わいたい。

ちなみに、ヒロインだけは別だが、その他はホントの家族？顔つきだけ見れば、私はそんな誤解をしてしまったが・・・。



■韓国では中国と同じく30歳前後の若手監督が大活躍！■

私が出資金の一部を負担した、『僕の帰る場所』（17年）（『シネマ41』105頁）と『毎日の彼女たち』（20年）の藤元明緒は1988年生まれの若手監督。日本でも彼のような30歳前後の若手監督は育っているが、中国や韓国のそれに比べると大きく遅れている。

私が注目している若手監督は、中国では①『凱里ブルース』（15年）（『シネマ46』190頁）、『ロングデイズ・ジャーニー この夜の涯てへ』（18年）（『シネマ46』194頁）のビー・ガン監督、②『象は静かに座っている』（18年）（『シネマ46』201頁）のフー・ボー監督、③『巡礼の約束』（18年）（『シネマ46』207頁）のソントラルジャ監督、⑤『ザ・レセプションリスト』（17年）（『シネマ46』212頁）のジェニー・ルー監督、韓国では①『はちどり』（18年）のキム・ボラ監督、②『82年生まれ、キム・ジョン』（19年）（『シネマ47』226頁）のキム・ドヨン監督などだ。

韓国では2020年12月に奇才、キム・ギドク監督が亡くなったことにビックリさせ

られたが、監督デビュー作で、第24回釜山国際映画祭4冠等の快挙を成し遂げ、一躍世界の注目を集めたのが、1990年生まれの手流監督、ユン・ダンビだ。パンフレットには、「驚くべきデビュー作！エドワード・ヤン、小津安二郎、ホウ・シャオシェンを彷彿とさせる、恐るべき才能」の文字が躍っているが、さて？

■□■ “家族の物語” を10代の少女の視点から！ ■□■

ポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）もある意味で“家族の物語”だが、同作は強烈なブラック・コメディだった。それに対して、これまでエドワード・ヤン、小津安二郎、ホウ・シャオシェンらの“巨匠”がそれぞれの名作で描いてきた“家族の物語”は、すべて心温まるほのぼのとしたもの。山田洋二監督の『男はつらいよ』（69年～95年）シリーズも、ある意味“家族の物語”だから、同作では「とらや」の“茶の間”がいつも「家族団らん」の場として登場していた。

渥美清の死亡後、第50作目として完成させた『男はつらいよ お帰り 寅さん』（19年）では、諏訪博（前田吟）とさくら（倍賞千恵子）夫婦の一人息子・満男（吉岡秀隆）の視点から“フーテンの寅さん”のさまざまな思い出と“家族の物語”が語られていたが、本作は10代の少女・オクジュ（チェ・ジョンウン）の視点から“家族の物語”が語られる。しかも、それは誰でも1つや2つ“思い出”として持っているはずの「夏休みの思い出」だ。「ユン・ダンビ監督 インタビュー」によると、本作は必ずしも彼女の実体験に基づくものではないそうだが、こんな映画を観ると、私にもあんなこんな“夏休みの思い出”が“家族の物語”の中にあっただけで思い出されることに・・・。

■□■ なぜ引っ越しを？この家族はいびつ？いやいや・・・ ■□■

『パラサイト 半地下の家族』ではタイトルにされていた「半地下」の住宅が印象的だったが、本作でオクジュが父親のビョンギ（ヤン・フンジュ）と弟のドンジュ（パク・スンジュン）と共に引っ越ししていくのは、郊外にある一戸建てのかなり立派な家。これは祖父のヨンムク（キム・サンドン）の家だ。ビョンギが「ここで夏を過ごす」と宣言する中で、4人家族の生活が始まることになるが、この家族は少しいびつ・・・？引っ越し作業中の父親・ビョンギと姉・オクジュ、弟・ドンジュの動きを観察し、おしゃべりを聞いていると、誰でもそう思うのが当然だ。その理由の一つは、この家族の中に母親がいないこと。ユン・ダンビ監督はその理由については何も説明してくれないから、それは観客が自ら考えるしかないが、やはり片親（父親）だけでは2人の子供の性格もどこか曲がってしまうの？いやいや、そんなことはないと思うのだが・・・。

そんなことを考えながらスクリーンを観ていると、ある日、この家を訪れてきた叔母（ビョンギの妹）のミジョン（パク・ヒョニョン）と一緒に夕食を食べたが、その席でミジョンはビョンギに勧められるまま一泊した後、一緒に暮らすことになったから、アレレ。旦那様を放っておいていいの？そう思っていると、ある日、ミジョンを尋ねてきた旦那様との間でミジョンは大喧嘩を展開していたから、さらにアレレ・・・。

■□■ヒロインも天才子役も好演！家族の絆は？■□■

『男はつらいよ』では、「とらや」の“茶の間”に集まっている面々はレギュラー陣だが、本作で最初にヨムク宅の茶の間に集まって夕食を食べるのは4人。その姿を見ていると、オクジュだけは突出した美人だが、祖父、父、弟の3人は、まるでホントの家族のように顔立ちが似ているのでビックリ！さらに、少し遅れてこの家に住み着いた叔母のミジョンも、女ながら兄・ビョンギそっくりの顔立ち（？）なので、これにもビックリ！それはともかく、一つ屋根の下で夏休みを過ごしているこの5人家族の様子（やりとり）を観ていると、一面では、仲が良さそうで仲が悪く、他面では、仲が悪そうで仲がいい、から面白い。

オクジュはお年頃だから、彼氏（？）がいるのは当然だが、お世辞にも弟に対して「優しい」とは思えない振る舞いが多い。それも年頃だからある面では当然かもしれないが、他面では如何なもの？また、ある日「二重瞼の手術のお金を貸して」と父親に頼むと、ビョンギからは「やめろ！」の一言だけで無視されてしまったから、オクジュの乙女心は大きく傷ついたはずだ。もっとも、そうかと言って、車に靴箱を積んで街へ行き、その路上販売で生計を立てているビョンギから、商売道具である運動靴をくすねて売却しようとしたら、それがダメになった後にそれを彼氏にプレゼントするのは如何なもの？夏休みは長いから、毎日一つ屋根の下で一緒に生活していれば、あれやこれやのハプニングが起こるのは当然だが、この4人、さらにミジョンを加えた5人家族の絆は如何に？ビョンギとミジョンが時々しんみり語り合っている姿や、祖父の誕生日をみんなで祝うシークエンスを観ていると、家族仲はメチャよさそうだが、さて？

ちなみに、オクジュ役を演じたチェ・ジョンウンの本作での演技は絶賛され、弟のドンジュ役を演じたパク・スンジュも「天才子役」と絶賛されているが、たしかにそのとおりだ。戦争映画でもサスペンス映画でもない、淡々とした本作は、淡々と“家族の物語”が進んでいくだけだが、目はずっとスクリーンに集中することに。

■□■“ひと夏の経験”の最後に訪れるものは？■□■

ビョンギたち家族には新型コロナウイルスによる（経済的）影響は全くないが、靴の路上販売ではその収入は知れているはず。また、ミジョンも夫から生活費が払われているとは思えないから、経済面には不安があるはずだ。また、ビョンギとミジョンにとってのこの“ひと夏の経験”は、①祖父のおもらし、②祖父の老人ホーム入れだったが、その延長としてビョンギがミジョンに「しばらくこの家で暮らそうか」と言うと、その反応は「お兄ちゃんはお家のお金を頼っていた、家まで貰うなんて」だったから、アレレ・・・？ひょっとして相続争いが発生？弁護士の私は一瞬そう思ったが、さて、その後の成り行きは？

また、ある日、見知らぬ女性に家を案内しているビョンギの姿を見たオクジュが「おじいちゃんに無断で決めてはだめ」とビョンギを責めると、逆にビョンギはオクジュに対して「お前も無断で靴を売ったじゃないか」と切り返してきたから、この家族は、姉弟喧嘩

が日常茶飯事(?)なら、時々起こる父娘喧嘩も激烈・・・?

山口百恵が1974年に歌った「ひと夏の経験」は大反響を呼んだが、さて、お年頃のオクジュが祖父の家で家族と共に過ごす“ひと夏の経験”の中で最後に訪れるものは?それは祖父のお葬式。そのお葬式には、思いもかけずビョンギの離婚した妻(=オクジュの母親)が出席していたが、その反応を含む、オクジュの心の動きは如何に?本作ラストに見るユン・ダンビ監督の「エドワード・ヤン、小津安二郎、ホウ・シャオシェンを彷彿とさせる」演出に注目!

2021(令和3)年3月26日記